GEKKAN-WIEN Juli & August 2024 令和６年７＆８月号 Nr. 413　平成元年創刊　gegründet 1989

月刊 ウィーン
GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 35 年目　Nr. 413
2024年7&8月号

Gustav Klimt　Bildnis Emilie Flöge　1902　Wien Museum　Foto: Birgit und Peter Kainz, Wien Museum

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 146

原子力発電環境整備機構（ＮＵＭＯ）は六月一〇日、佐賀県東松浦郡玄海町において、高レベル放射性廃棄物等の地層処分地選定に向けた文献調査を開始した。五月一〇日、同町の脇山伸太郎町長が文献調査受け入れを表明。文献調査の実施は、二〇二〇年に開始された北海道寿都町・神恵内村に続き三件目である。

文献調査は、処分地選定に係る最初の段階。関心を示した市町村を対象として、地域の地質に関する文献・データについて机上調査を行うもので、調査期間中、国から最大二〇億円が交付される。玄海町には原子力発電所が立地するが、同調査で放射性廃棄物は一切持ち込まれない。

https://www.jaif.or.jp/journal/japan/23441.html

同町では、四月より地元商工団体の要請を踏まえ、町議会で文献調査応募に係る議論がなされたほか、五月一日には資源エネルギー庁より申入れ文書が町長に手渡された。

新たな文献調査の実施に際し、ＮＵＭＯの近藤駿介理事長はコメントを発表。「地層処分の技術・安全性を含む事業内容や文献調査の進捗状況・結果などを丁寧に説明しながら、地域の皆様の関心に丁寧に答えていく」としている。地層処分事業を実施する立場から、文献調査について「最終処分施設建設地の選定に直結するものではない」と、あらためてその位置付けを強調。今後、玄海町では、北海道二町村での実績を踏まえ、地元との「対話の場」が開かれる見通し。ＮＵＭＯでは引き続き、全国での対話型説明会開催や次世代層への啓発に向けた取組を通じ、理解活動に努めていく。

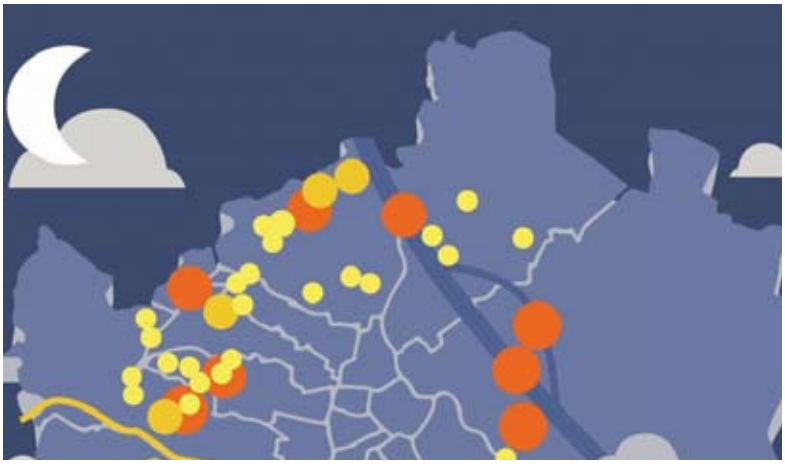
齋藤健経済産業相は、六月一一日の閣議後記者会見で、文献調査を受入れた玄海町に対する敬意・謝意を述べた上で、原子力発電を利用した後の高レベル放射性廃棄物の処分問題に関し、「国家的課題だ」とその重要性を強調。最終処分に関する検討が全国レベルで行われるよう、必要な情報提供を図っていく姿勢を示した。

なお、総合資源エネルギー調査会の有識者ワーキンググループでは現在、寿都町・神恵内村での文献調査取りまとめに向けた審議が行われているところである。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生きる動物（その一）を紹介したい。ウィーン中心部から北へ約五ｋｍ、北の森の入口にあるグリンツィングの周辺にはぶどう畑が広がり、たくさんのホイリゲ（その年に出来たワインを提供する居酒屋）が集まっている。七月に入ると、ぶどう畑やホイリゲ近くの道路周辺で蛍を目撃したとの話を聞いたり、その報告がネットに上げられたりする。さらに北にある標高四八四ｍのカーレンベルグでも蛍がよく見られる。ウィーンでの蛍の目撃地を詳細に取りまとめたサイトもあり、これによると、ウィーン市内では二、一一、一三、一四、一六、一七、一八、一九、二一、二二、二三区で目撃され、一、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一二、一五、二〇区では目撃されていない。あまり知られていないが、ワルツ王ヨハンシュトラウスの弟、エドゥアルト・シュトラウス一世がワルツ「蛍」を作曲している。蛍が幻想的に舞う姿を彷彿させる軽快な曲であるが、ウィーンでは百五〇年以上前から蛍が良く見られていたことの証左と考えられる。

一方、京都市内にも五月末から六月に入ると、何ヶ所かで蛍を見ることができる。平安貴族の別荘地として愛され風光明媚な「嵯峨野・嵐山」。夕暮れの渡月橋界隈から嵯峨野方面、大覚寺に広がる大沢池のそばを流れる有栖川のほとりは蛍が飛び交い、平安貴族も蛍を観賞していた。清少納言の「枕草子」にも「夏は夜。・・蛍の多く飛び違えたる」とあり、千年以上も前から京都では蛍が飛び交っていた。京都最古の神社のひとつである上賀茂神社は、境内には賀茂川を水源とする美しい川が流れ、初夏には南側の「ならの小川」沿いで蛍を見ることができる。また、下鴨神社内の糺の森で「蛍火の茶会」が開催される「瀬見の小川」沿い、銀閣寺～南禅寺を結ぶ道を西田幾多郎が思索しながら歩いたと言う「哲学の道」の疎水縁、鴨川の分流で鴨川の納涼床の真下を流れる小さな川「みそそぎ川」沿いなども蛍の名所。「みそそぎ川」は丸太町通～二条通の間に蛍が多く飛んでいる。このポイントは京都で最も賑わう繁華街・河原町や観光でも有名な祇園から約一ｋｍという近さである。

余談であるが、ウィーン在住時の初夏のグリンツィングにあるホイリゲのぶどう畑で蛍を目撃したことを思い出す。京都ではみそそぎ川の近くに住んでいたので、五月末の夜九時頃に毎年家内と一緒に蛍を観賞した。今月も両地に生きる動物を紹介することができた幸運と、ウィーンや京都のような大都市で自然の蛍が観賞できる贅沢さに感謝しつつ、みそそぎ川のほとりを飛び交う蛍の写真を掲載させていただく。

＊謝辞：ウィーンの蛍について、日墺協会顧問内藤香氏からの情報提供に感謝します。

■ 杉本純　元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■